

『戦争論理学 あの原爆投下を考える 62問』 ノート

三浦俊彦

■■本書のねらい — CT (クリティカルシンキング), STS (科学技術社会論) の観点から

正当な結論は、真なる前提と正しい推論によって導き出される。

原爆投下をめぐる言説は、その前提となる必須知識——大日本帝国の意思決定機構、ヨーロッパ戦域とアジア戦域との関係、ポツダム宣言の文面、ソ連参戦の事情、ダウンフォール作戦と決号作戦の実態など——が共有されないまま、感情論に流れる傾向がある。

基礎知識の体系的整理とともに、汎用性ある推論方法の包括的試演が望まれる。

1 ■歴史的知識の「欠如」を補う ……前提の正しさを確保

敗戦～連合軍進駐の半月間における、日本政府・軍による文書破棄・証拠隠滅のため、「評価」以前に「解釈」の余地が大きくなっている。その事情を自覚しつつ、確証された諸事実をなるべく有機的に関連づけねばならない。

2 ■推論方法の「欠如」を補う ……推論の正しさをチェック

- ・事実の内挿的推論と反事実的確率的推論
- ・論理的推論と実践的推論
- ・通俗的推論と分析的推論
- ・心理学的傾向と規範的基準

3 ■STSへのCTの適用と、CTへのSTSの充填

STSとCTは、それぞれ「科学（技術）批判」と「科学的方法」という一見対立する関係にあるが（cf. 伊勢田哲治「STSとクリティカルシンキング教育：実り多い融合は可能か」STS Network Japan 関西定例研究会，2009年6月28日，於京都大学）、戦争論はその対立を最も先鋭に際立たせる。

科学はその応用力ゆえに戦争遂行に有効であり、かつ、その批判的合理性ゆえに戦争防止にも有効である。大殺戮によって戦争を終結させた原爆投下とそれをめぐる諸議論は、科学の社会的機能を考えるうえで最適のテーマと言える。

■ ■ 自己評価

* (肯定的)

1 ■ 日米戦争と、欧州戦域・中国戦域との関連を強く意識し、世界情勢全般からの全体的視点を設定した。

2 ■ 第二次世界大戦論が看過しがちな「比較」の視点を重視した。日独伊それぞれの降伏の比較、戦艦大和特攻と原爆投下との心理学的類似、アメリカ空軍創設と硫黄島攻略との政治的関係、現実バイアスと特定者バイアスとの対照（第 55 問）、等々。

3 ■ 「戦争努力」という判断基準を前提し、戦争犯罪の「悪」の度合を多元論的に捉えた。（ニヒリズムの防止）

4 ■ 功利主義を軸とする簡明な価値基準を暗に押し出し、論争しやすい仕様とした。（ただし、功利主義「的」観点を採用しているだけで、倫理学理論としての功利主義を厳密に前提しているわけではない。p. 238 下から 2 行目参照。）

5 ■ 政治的立場や情緒的反応を基軸とする大多数の戦争論に対し、知的アプローチに徹した。（とくに、被爆者視点の原爆論の分析的吟味）

6 ■ 日本で賞賛されがちなアメリカ国内の修正主義に対する、一般的とは言えない批判を明示した（第 62 問）。ただ、修正主義的言説はさまざまであり、論ずる余裕のなかったものも多い。（例：ジョン・ロールズの"Fifty Years after Hiroshima" in Collected Papers のように、「民主主義陣営は正義側なのであるからその行為の倫理的評価基準を厳しくとるべし」的前提に暗に依拠する原爆否定論など）

* (否定的)

7 ■ 立証責任を「肯定論」に負わせた結果、皮肉にも、実際以上に肯定論優勢の印象を与えたかもしれない。

8 ■ 著者の大日本帝国嫌いのバイアスが影響して、アメリカの戦略的立場を擁護しすぎたかもしれない。

9 ■ 「完璧主義の誤謬」（序章）と「背理法」（第 54 問）との区別をもっと強調すべきであった。pp. 215～6 に述べてはあるのだが、現に誤解を生んだようなので。

たとえば、p. 217 「含意のパラドクス」の説明は、完璧主義の誤謬が誤謬でないかのような印象を与える。実質含意と関連含意の説明まで踏み込み、実践的推論では実質含意は採用されにくいことを論じるべきだったかもしれない。

10■ 功利主義以外の倫理的立場からの原爆論がほとんどなされなかった。

(参考：本書とほぼ同時に邦訳出版された『原爆投下とトルーマン』（J. S. ウォーカー著、彩流社）は、原爆投下の最大の動機は米兵の命の救助であったとし、身内びいきを容認する（徳倫理的？）立場から原爆投下を擁護している）

11■ テーマをめぐる体系的論述であるかぎり、方法論（CT）の道具立て（推論や誤謬の種類）の紹介としては体系性に欠けることになった。

* 語句・細部の反省

12■ 第 53 問、メタ倫理学の分類で「投影主義」の語を用いたが、より正確には「擬似実在論」と書くべきだったかもしれない。「投影主義」は広義には「情緒主義」「指令主義」「表現主義」などを包括するからである。

13■ CT用語の紹介については、細分化しすぎたところがあり、執筆中にだいぶ整理したものの、不必要な区別が残ったところがある。（p.191 のコラムなど）

14■ ポツダム宣言への日本政府回答「天皇の国家統治の大権を変更するの要求を包含し居らざることの了解の下に」の「天皇の大権」という語の意味に、もっとこだわるべきであった（第 27、32、33、60 問など）。天皇制は残されたとはいえ、「天皇の大権」が戦後も認められたとは到底言えない。つまり、最後まで日本政府は連合国に認められがたい条件に固執していたことになり、これは肯定論にさらに有利な材料となるだろう。（「国体」の空虚さについてはあとがきで触れたが）

15■ 第 46 問の「必要性」は、循環論法に巻き込まれている疑いを感じさせる。原爆投下のこうかをサポートするという意味での「必要性」を確保するために、それとは独立の「必要性」を論証しなければならないのに、日本の迅速な幸福をもたらすためには必要だった、という非独立の「必要性」が強調されてしまった感がある。ソ連の国益確保にとって必要だった、という方をより強調すべきであった。

16■ 第 28 問コラムで、「ハンディキャップ原理」の誤用の実例として「幸運の壺」を出したが、この例は外見上ハンディキャップ原理に似ているだけで、構造的には違うという例である。構造的に確かにハンディキャップ原理でありながら、偽なる主張であるという例を出した方がよかったかもしれない。

17■ p. 263 1 1 行目 「連合軍捕虜移動の怖れ」については、本文では触れていない。「最大の心理的効果」が達せられなくなる」に代えるべきだったか。

■■ 主たる反応

1 ■ 天皇の戦争責任を過大に見積もりすぎているのでは？

掲示板過去ログ 2008年9月17日～11月13日 参照

<http://tmiurat.cool.ne.jp/bbs2008-2.htm>

2 ■ 論理的推論に占める感情の意義は、無視できないのでは？（第56,57問など）

3 ■ 「戦争そのものがあるまじき事態だから、原爆投下は仕方ない」という原爆肯定論を批判しながら、「原爆投下すら許されてしまうのだから、戦争はあるまじき事態に違いない」という背理法を支持しているのは矛盾ではないか？（自己評価 9 参照）

4 ■ 第50～53問の「肯定論の有害な影響」は、杞憂ではないか。正論に説得されるような人であれば、不当な悪影響は受けないだろう。（選択効果）

■■誤植訂正

★p.11 13行目 だったために → だったために

★p.21 下から7行目 肯定派 → 否定派

★p.22 下から3行目 いう → という

★p.76 答え 1行目 前問 → 本問

★p.187 4行目 威興の 威 → 「感」の心を抜いた字 威興
索引も ハムフン または かんこう へ移動

★p.187 2行目、下から8行目
「新しい対ソ作戦要領」 → 「新しい対ソ作戦計画要領」

★p.253 極限 → 局限

★索引 メタ性質 23 は、学術用語の索引へ移動

★索引 第一次大戦（第一次世界大戦） 28, 129, 148, 231, 242

★索引 「新しい対ソ作戦要領」 187 → 「新しい対ソ作戦計画要領」 187

★索引

日独伊三国軍事同盟 60, 112 → 日独伊三国軍事同盟 (三国同盟) 60, 80, 112

★日清戦争 32, 112, 242

★寛容の原則 ……243 → ……242

■■改善

★p.74 10行目 アメリカが持っている → アメリカが作った

★p.97 下から8～7行目 戦争を → 戦争終結を

★p.101 下から8行目 原爆投下 → 原爆投下肯定論

.....

■■参考資料

↓「人文死生学研究会」での書評者のレジュメ↓
<http://tmiurat.cool.ne.jp/SensoRonrigaku-gnote.pdf>

↓「CT-S-TS研究会」での書評者のレジュメ↓
<http://tmiurat.cool.ne.jp/SensoRonrigaku-gnote2.pdf>

